**第一章　　蟲辱の宴**

　――都内某所にある高級ホテル「ラプンツェル」は、設計図上では地上三八階、地下四階となっており、実際、建物の内部もそのとおりの造りとなっている。しかしこのホテルには、設計図には記載されていない地下五階が存在しているのだった。

　高級ホテル「ラプンツェル」の地下五階部分には多種多様な設備を兼ね備えた部屋が幾つもあって、そのなかでも最大規模の空間は、分厚いコンクリートと最新の防音設備が整った巨大ホールであった。中は自衛隊一個連隊が余裕をもって整列できるほど広く、高さもあり、中規模なコンサートやイベントが地上に迷惑をかけないで開催できるほどのスペックを誇っている。

しかし、この場所が一般に開放されることはない。この場所は、黒の会のメンバーたちが集まって、公にはできない宴を愉しむ専用の場所であるからだ。

　･･････この日のニュースでは、日本白の党の新党首に、元グラビアアイドルの代田真凛が選ばれた話題でもちきりとなっていた。

代田真凛は、まだ二五歳と若いだけでなく、その美貌もさることながら、バスト一二五センチ、ウエスト五七センチ、ヒップ九〇センチという驚異の肉体持ち主であることで有名だ。グラビアアイドルとして活躍していた時代には、「美の女神のカラダを持つ女」と呼ばれていたほどで、日本人離れしたその豊満恵体は、多くの男たちを虜にしたものである。

そんな彼女がメディアの前に久しぶりに登場すると、集まったジャーナリストたちは思わず息を呑んだ。姿が変わり果てていたからではない。むしろその逆だった。彼女の豊満な肉体と美貌はいささかも衰えていないどころかむしろより洗練されて磨きに拍車がかかっており、神話に登場する女神がまるで会見の場に降臨したかのような印象を記者たちに与えたからだ。

「――日本白の党は、結党以来、常に弱い立場の人たちに寄り添い、彼らと共に歩みを進めてきました。わたしは、偉大な先人たちに倣い、弱い立場の人たちのために、ひとりの政治家として、誠心誠意、戦っていく次第であります」

　という代田真凛の堂々たる会見を、真面目に聞いていた者はどれほどいたであろうか。

多くの者は、彼女の言葉に耳を傾けるよりも、その美しすぎる容姿と、大きすぎる乳房に視線がいってしまい、会見の内容は頭の片隅にすら残らなかったであろう。

芸能界に在籍していた当時の彼女の活躍は多岐に及ぶ。

その美貌と豊満な肉体を武器にして、テレビやネットだけでなく、女優としてドラマや映画に出演し、歌手としてデビューも果たした。詩人として詩歌を出版したり、アニメ声優として有名キャラクターの声を担当したりもした。販売した写真集にいたっては、この出版不況が叫ばれる現代において一〇〇万部超えを連発し、ほとんど全裸に近いマイクロビキニを着用した写真集「わたしを見て♡」では、出版社の販売戦略が成功したからでもあるが、なんと脅威の一六二万部という数字を叩き出して日本中を驚かせたほどである。

彼女は一八歳でデビューしたのだが、顔もよく、カラダもよく、声もよく、頭も良かったため、「あと二〇年は最前線で活躍するだろう」と予想されていた。

だが、その予想に反して、代田真凛はたった五年で芸能活動を引退してしまったのだ。当然、惜しむ声や引き留める声は多かったが、「やりたいことがあるんです」という本人の強い意思を覆すことはできず、彼女は表舞台から消えてしまった。

　その二年後、わずか二五歳という若さで、日本白の党の党首になったと報じられたのだから、日本中が驚いたのは無理もない。

引退会見の際に語っていた「やりたいこと」というのが、まさか政治活動であったとは、誰も想像すらしていないことであった。

――その夜である。高級ホテル「ラプンツェル」の地下五階に黒の会のメンバーたちが集まって、彼らの狂宴が催されたのは。

･･････この夜、高級ホテルの地下五階に集まった人数は三八人だった。黒の会に所属するＶＩＰのおよそ三分の一の人数である。広くて薄暗い会場内には、浮島のようなテーブルが幾つか用意され、集まったＶＩＰたちが席に着いていた。テーブルの上にはイセエビやら飛騨牛やらフォアグラやらトリュフやらをふんだんに使った豪華な料理が並べられて高級酒が林立しており、ひとつのテーブルだけで、一般的な会社員の年収に匹敵する金額が費やされていた。

席に着いたＶＩＰたちは、いずれも政財界の大物たちである。世間に顔が知られ、テレビやメディアに登場したことがある者も多く、ゆえに、万が一の事態に備え、会場の照明は最低限の明るさを残して暗く調整されており、さらにメンバーは目元を隠す多面を着用していた。口元が覗いているのは、酒や食事を愉しむためである。その口元に、愉悦めいた笑みが浮かんでおり、時おり口角の端から涎が滴る有り様は、なにか人外めいた怪物が人間の真似を模倣しているように見えて不気味なことこのうえなかった。

「さながら悪魔の晩餐だな」

影から、会場内の様子を眺めながらそう心の中で呟いたのは、黒の会の実働部隊の長を務める黒堂芥であった。年齢は三十三歳、長身で、引き締まった身体つきをしており、着用している黒のスーツがよく似合う。美男子ではないが整った顔つきをしており、髭が薄いため、実年齢より若く見えた。幼い頃の夢は、悪者を倒すヒーローになることだった。現在の彼は、暴力のスペシャリストであり、戦闘と、格闘と、殺人と、暴行と、拷問のスペシャリストである。そして、人心掌握に長けた優れた指揮官でもあった。

　黒の会に所属するメンバーが、いかに巨大な権力と財力を有していようとも、彼らの欲望を具現化するためには「手足」が必要である。有能で、任務に忠実で、暴力や殺人を犯すことに躊躇いがなく、沈着で、冷静で、自分に課せられた役割を捨てずに最後まで果たす。大金と引き換えに良心を悪魔に売り渡すことをいとわない人間が、黒の会には必要だった。

そのような人間は決して多くない。ゆえに、実働部隊の人間は、最初は数人から少しづつ時間をかけて集められてゆき、途中で幾度かの粛清を挟みながら、いまでは一個大隊を編成するに足る人数まで膨張している。元軍人の肩書きを持つ者がもっとも多く、外国の諜報部隊や公安部隊に所属していた者、さらには現役の警察官も秘密裏に多数所属していた。

この部隊を、黒堂芥は、完全に掌握することができていた。そして黒の会の意向に沿って手足のごとく動かすことができたため、会からの信頼も厚く、かなり自由が効く行動をとることができた。

　実働部隊の業務内容は、黒の会メンバーの護衛と送迎、会場の設定と給仕、施設の警備、邪魔者の排除、敵対者の暗殺、情報収集と分析、そして生け贄の調達と趣向を凝らした催し物の提供である。特に最後の任務がもっとも重要だった。

　黒堂芥は、会場内を見渡して、テーブル上の酒と料理がほどよく消費されていることを確認した。

「さて、そろそろか」

今度は口にだして呟くと、耳に装着しているインカムを操作した。

「宴を始める。生け贄を用意しろ」

『了解しました』

阿吽の呼吸で物事が進むのは、それだけ事前の準備が完璧だからである。薄暗い会場の中央が証明で明るく照らし出されたのは、指示が出てからきっかり五分後のことであった。

パッ！

それぞれのテーブルで食事をしていた黒の会のメンバーが、照明で照らし出された中央に視線を向けた。そこには、どこかピエロめいた、奇抜なメイクと奇妙な衣装の男がいつの間にか立っていた。司会進行役である。

「レディース＆ジェントルメ～ン。今宵も哀れな生け贄が、阿鼻叫喚の地獄へ落ちる有り様をご覧になるために、遠路はるばるお集まりになった変態紳士淑女の皆さまこんばんは。今宵も皆さまの黒い欲望を満足させるべく、趣向を凝らした催し物をご用意いたしましたので、ぜひ最後までお愉しみください」

変態紳士淑女などと言われても、会場内から抗議の声はあがらなかった。実際、そのとおりだと、ここにいる誰もが自覚していたからであり、平然と受け止めるだけの度量の持ち主たちばかりだったからだ。

　奇抜なピエロが司会を続ける。

「それではまず、お手元のタブレット端末をご覧ください」

メンバーに配られているタブレット端末の画面に、ひとりの美しい女性が映しだされた。

若い、明るく快活そうな娘だ。今日のニュースで話題になった代田真凛ほどではないにせよ、容姿は端麗で整っており、痩身で、華奢な手足は細くしなやかであった。乳房が小さい点がやや残念ではあったが、きめ細かな肌がとても白くて美しい。タブレットを操作すると、彼女の写真を何十枚と見ることができた。

画面の中でスライドする娘は、白いワンピースを着ていたり、布地が小さな水着を着ていたり、下着姿でくつろいでいたりする。写真のなかの彼女はどれも清楚な雰囲気を醸し出しており、笑顔で写っていたが、スライドが進むにつれて表情が異なる写真が増えてきた。

それは全裸姿を撮ったものであった。小さな乳房も、かわいいお尻も、そして陰毛を剃られてツルツルになったアソコも、一切隠すことなく様々な角度から撮影されている写真の数々は、そのどれもが表情が暗く、時には哀しげに涙を流しているものまであった。これは全裸姿の写真が、彼女の意に沿わぬ形で撮影されたことを意味していた。

奇抜なピエロが、彼女について説明した。

「もしかしたらご存じの方もいるかもしれませんが、彼女の名前は朝比奈悠亜。年齢は二十歳になったばかり。とある芸能プロダクションからモデルとしてデビューするはずだった娘です」

タブレット端末を操作すると、彼女の詳しい経歴を見ることができた。

出身は東北地方の田舎町で、家族構成は母親がひとりだけ。父親はすでに他界しており、両親が駆け落ち同然で結婚したため祖父母とは疎遠になっている。学業成績はそれなりによかったが、家庭の経済的事情から大学への進学は諦め、容姿とスタイルに自信があったことからモデルを目指して上京する。そしてトントン拍子にデビューが決まったのだが、そこで問題が発生した。

「なんとこの娘、当時の担当マネージャーと恋に落ち、デビュー直前でまさかの駆け落ち失踪しやがったのであります！　まさに血は争えぬということかあぁぁぁぁ！」

当然、損害が発生し、失踪された芸能プロダクションは激怒した。

ただ、世間的にはそれで終わりだった。

失踪は、この業界ではよくあることだし、決まっていたデビューがタレント側の都合で白紙になることも珍しくないからだ。ただ、ケジメをつける必要はあった。その身命をもって。失踪した彼女たちの不幸は、黒の会に目をつけられてしまったことであろう。

「我々は恩を仇で返された芸能プロダクションの無念を晴らすべく、この恩知らず女たちの行方を追いました。その結果、九州で新生活をはじめようとしていた娘とマネージャーを発見し、その身柄を確保することに成功したのであります。時間の都合上、マネージャーの末路につきましては割愛させていただきますが、恩知らず女こと朝比奈悠亜にはたっぷりとその報いを受けさせるべく、我々はこの一か月、彼女に対して、仕込みに仕込みを重ねて熟成させてきたのであります！」

ちなみに、朝比奈悠亜と一緒に捕まったマネージャーの末路についてはタブレットから確認することができた。動画のなかでマネージャーは、朝比奈悠亜の目の前で、メキシコマフィアも真っ青になるような拷問を受けたあと、生きたまま豚の餌にされたのだった。

　だが、彼はまだ幸いだった。わずか一昼夜の拷問だけで死ねたのだから。生け贄に選ばれた朝比奈悠亜はそうはいかなかった。

「それでは、今宵は恩知らず女こと朝比奈悠亜を使いまして、皆さまに愉しんでいってもらいたいと思います。では、ご覧ください。この一か月、仕込みに仕込まれて熟成された贄女のいまの姿を！」

　　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。

**第二章　　叫喚の宴**

　･･････子どもに対して邪まな性的欲望を抱く者が社会には一定数存在することは周知の事実である。小児性愛者、児童性愛者、ロリコン、ペドフィリアなど、彼らの呼び名は様々であれど、現代社会ではおおよそ「医学的疾患者」として扱われることが多い。中には自分の性癖を自慢気にあえて公言する者もいるにはいるが、その数は少なく、多くの者は白眼視を恐れて口をつむぐ者のほうが多かった。

　様々な性的嗜好が許容されつつある現代社会において、なお小児性愛者が白眼視されている理由は、そのような性的嗜好を持つ者が、子ども（特に女児や少女に対して）、なんらかの性加害を加えるのではないかと恐れられているからである。

確かに、少女に対して性犯罪をする者は存在しているが、その数は決して多くはなく、むしろ少数といえる。大多数の者は、物品や脳内で完結させることがほとんどで、実際に手を出す者は数えるほどしかいない。ただ、少女たちに対する性犯罪は、一度、事件化してしまうと、各種メディアを通じて大々的かつセンセーショナルに扱われるため、少女たちに対して性的欲望を抱く者は総じて犯罪者あるいは犯罪者予備軍と見なされること少なくなかった。

　幼い、あるいは年齢の若い少女たちに対して、邪まな性的欲望を抱く者は、むろん、黒の会のメンバーにもいる。その数は決して多くはないものの、大企業の経営者や宗教団体の教祖などが、自分の孫ほどの年齢の娘たちにギラギラとした欲望の眼差しを向ける光景は、人間の業の深さを語っているといっていいだろう。しかも、彼らの場合、財力や権力がある分、市中の者たちよりもはるかに闇が深く、そして底も知れなかった。

　彼らは年齢の若い少女たちが、言葉では表現できないような「酷い目」に遭うことを心から望み、その光景を見て涎を垂らして喜んだ。

もちろん、年齢が若い少女であれば誰でもいいわけではない。容姿は端麗で、肌が綺麗で、手足は細く、身体は華奢で、生命力に溢れており、健康で、なにより元気でなければならないのだ。テレビに出演するようなジュニアタレントやジュニアアイドル並の少女たちが「酷い目」に遭わないと興奮しないのである。まったく、度し難い。変態の極みというべきだ。

黒の会の手足となって働く実働部隊は、そんなロリコンＶＩＰたちの欲望を叶えるべく、そのような美少女や美幼女たちを調達するため奔走することになるのだが、大人と違ってこれがなかなか容易なことではなかった。

家庭環境に問題があったり、児童養護施設に入所したりしていれば、少女たちの調達はそれほど難しいことではない。だが、育ちの悪さが身心の発育に悪影響を及ぼすのは研究で明らかにされており、そのような劣悪な環境で育った者のなかに見目よい美少女はなかなかおらず、だからといって、養殖のように赤ん坊のうちから美少女になるよう育てるわけにもいかなかった。かくして、実働部隊がよく使う調達手法が拉致誘拐なのであった。

――今年の夏、新潟県でひとりの女子〇学生が行方不明になった。

少女の名前は長内歩美、年齢は一×歳。学校教育の一環として一泊二日のサマーキャンプに東京から参加していた彼女は、夜間の肝試しの最中、まるで神隠しにでも遭ったかのようにそのまま行方がわからなくなってしまったのである。警察と消防に加え、地元住民も参加した大規模な捜索活動がおこなわれたものの、彼女の行方はようとして知れなかったのである。

　各種メディアを通じて彼女の顔写真が公開されると、その可愛さから、ネットでは変態に捕まって性的虐待を受けているのではないかとまことしやかに語られたものだが、その推測は、方面としては半ば正解であった。

　行方不明となった長内歩美は、かなり前から黒の会の生け贄候補として目をつけられていた。彼女の容姿、年齢、体格や身体的特徴のみならず、家族の社会的地位が低いことも生け贄の条件に当てはまっており、かくして実働部隊による拉致誘拐が、隙を見て実行に移されたのであった。

　彼女の末路は悲惨を極める。黒の会に誘拐された長内歩美は、非合法の身体改造薬を投与されて全身の軟性を高められたあと、宴の催し物として、馬と無理やり交尾させられたのである。しかもそれは、母親がテレビに登場して、涙ながらに娘の無事を願う言葉を発した日であった。

『神様、どうか、どうか歩美を助けてください。娘が無事でさえいれば、もう他に望むものはありません。みなさん、どうか娘の無事を祈ってください。娘が――歩美が元気な姿で見つかることを、どうか、どうかお願いします。お願いします･･････』

　そのような映像が大画面で報道されているその傍らで、長内歩美は、その小さな身体を凌辱されていた。四肢を器具で固定され、どうやっても動けないようにされてから、小さなキツキツの未使用マンコ穴を、自分よりも遥かに大きな馬に犯されていたのである。

　そう、馬だ。人間ではなく、馬に犯されているのである。しかも、その馬というのが普通の馬ではなかった。長内歩美を犯した馬は、薬物投与によって脳ミソを破壊され、精力を極限まで高められた狂暴な絶倫馬だったのである。この絶倫狂暴馬に犯されると、雌馬でさえ発狂すると言われていた。勃起したペニスは並の馬サイズのソレではなく、それこそ子どもの体格ほどの長さと太さがあったのだ――もっといえば、誘拐された長内歩美の身長と体格とほとんど同じサイズだったのである。

　そんなモノを、薬物で身体を軟化させられているとはいえ、小さなキツキツの未使用マンコ穴にぶち込まれたらどうなるか。答えは、悲惨のひと言に尽きる。

「うぎゃあああぁぁあぁああぁぁあぁぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁッッッ！　おおおおなかがッ、からだがあぁああぁぁッッッ！　ぐげえぇぇえぇえぇぇぇえぇぇえぇぇぇぇッッ！　いいい痛いッッ、ぐるじぃぃいぃぃッッ、ごわれるッッ、かかかかからだがッッ、壊れぢゃううぅぅうぅうぅぅうぅぅぅうぅうぅぅッッッ！　んぎゃあぁああぁぁぁぁあぁぁあぁぁぁあぁぁぁぁぁぁッッ！　し、死ぬッ、死んじゃうッッ、しぬううぅうぅぅぅうぅぅうぅぅぅうぅぅぅぅぅッッッ！　うがあぁぁぁああぁぁぁぁぁあぁぁぁあぁああぁあぁあぁあぁぁぁッッ！　マ、ママーッッ、だずげでママー、ママーッッッッッ！　ぐぎゃあぁぁぁあぁぁぁぁああぁあぁぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁああぁぁぁぁぁぁぁあッッッ！」

　怪物のような巨大イチモツを小さな膣穴に無慈悲にねじ込まれ、絹を裂くような声でもって悲鳴をあげる長内歩美。

　その叫び声に反応してか、彼女を犯す絶倫狂暴馬は、狂ったように鼻を鳴らしながら嘶いた。

「ヒヒーンッッ、ヒヒヒヒーンンンッッ！　ブルヒヒヒーーーンッッッ！」

嘶きながら、充血した目を血走らせ、顔面の血管を浮かび上がらせながら、絶倫狂暴馬が激しく腰を振る。そして、その荒ぶる巨大なイチモツを、少女の胎内めがけて何度も何度も出し入れするのだ。

ズボオオッッ、ボゴオオオッッ、バゴゴオオオッッ、ベゴオオオオッッッッ！

「うっごおぉおぉおおおぉぉぉおぉぉぉおぉぉぉぉッッッ、ぐおうごぉぉおぉぉぉおぉぉぉぉぉおおぉぉおぉぉぉぉぉぉッッッ、うおうぐぎゃぎゃがぐがぎゃあああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁああぁぁあぁぁぁあぁぁあぁぁあぁあぁぁぁッッッッ！」

絶倫狂暴馬が激しく腰を振るたびに、長内歩美のほっそりとした腹部は巨大イチモツ状に大きく膨らみ、肉をミンチにするような音を立てながら大きく凹む。途中、骨が砕ける音や、内臓が潰れるような音もするのだが、絶倫狂暴馬による激しい馬姦には、「容赦」という二文字が欠落しており、長内歩美は何度も何度も繰り返し激しく腹を突かれて、そのつど、彼女は口から血が混じった泡を噴きながら、凄まじい形相でこの世のモノとは思えぬ絶叫をあげて悶え苦しんだ。

「ぐうげあぁぁあぁぁあぁあぁぁぁぁあぁぁぁああぁあぁぁぁあぁぁぁぁぁぁあぁぁッッ！　じッ、じぬッッ、死ぬうぅぅうぅぅうぅぅぅうぅぅうぅぅぅぅぅうぅぅうぅうぅぅぅぅーーーーーーッッッッッ！　からだがッッッ、壊れでッッッ、うがあぁあぁぁあぁぁあぁあぁぁああぁぁぁあぁぁあぁぁぁぁあーーーーーッッ、があッッ、ぐふがぁぁぁああぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁーーーーーーッッッッッ、ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああーーーーーーーーーーッッッッッッッ！」

長内歩美の大きく見開いた白目に、色濃く血管が浮かび上がった。

その狂気に満ちた視線が向けられている先には、大スクリーンに涙を浮かべながら無事を願う母親の姿が映し出されているのだから悪趣味という他ない。この醜悪極まりないショーを見て、黒の会のＶＩＰたちは愉悦の笑みを浮かべているのはいつもの光景なのだが、このショーの映像を、プライベート用のスマートフォンに保存していたＶＩＰがいたのだ。そして、その映像が記録されたスマートフォンが盗まれたときた。

　黒堂芥はすぐに対応に迫られた。彼は人や物の捜索を専門におこなうチームに連絡すると、盗まれたスマートフォンの行方を追うと同時に、窃盗の背後関係の調査もはじめたのだった。

「単なる物盗りであれば犯人を始末してそれで終わりだ。だが、背後に組織があったら面倒だな」

黒堂芥はＶＩＰのスマートフォンが盗まれた時間、場所、状況などを詳しく精査させた。その結果、一緒にカードや多額の現金や貴金属類があったにもかかわらず、ＶＩＰの持ち物で盗まれた品は件のスマートフォンだけだったのである。しかも雑ではあったが発覚を遅らせるような細工まで施されていたのだ。そして、件のスマートフォンは、盗まれたあと一度もネットに接続されていないことも判明したのであった。

　黒堂芥は警戒の度合いを強め、各部隊に通達をだした。

「犯人の狙いはデータだ。流出だけでなく、詳細に解析されたら厄介だ。場合によっては「大掃除」の必要が生じるかもしれない。全部隊員は緊急の出動に備え所定の場所で待機せよ」

たとえデータが外部に流出しても、黒の会の財力と権力と影響力をもってすれば打てる手はいくらでもある。表向きには悪質なフェイクと処理することもできるし、人工知能で生成した動画だと誤認させることも不可能ではないだろう。あるいは外国の出来事と情報を操作することもできるのだ。

だが、世間がそれで納得しても、わずかな綻びが致命的な破綻をもたらす可能性があるのが世の常だ。歴史を振り返れば些細なことで破滅を迎えた例は少なくない。たとえば、鉄壁を誇った城壁に守られながら、裏口から侵入を許したせいで破滅したビザンチン帝国のように。

「背後関係を含め、万事あと腐れなく解決する。それ以外、平穏はあり得ない」

実働部隊の能力の高さはすぐに証明された。窃盗事件発覚からわずか三十六時間後、ＶＩＰのスマートフォンを盗んだ犯人が特定されたのである。

その人物の名前は生谷冬馬といった。年齢は三五歳。派遣社員としてカヤキ製薬に出入りしており、事件当日、本社内で不審な動きをしている姿が確認された。家族関係も調べられた。妻はすでに病気で他界しており、〇歳の娘とふたり暮らし。両親は旅行先の事故で亡くなっており、義両親は失踪している。借金や家賃滞納などの経済的困窮も確認された。しかし、背後関係は不明のままだ。

　報告書をもってきた部下が尋ねた。

「やはり、ただの窃盗でしょうか」

「それは調べてみないとわからんな。とりあえず、生谷父娘を拉致しろ。すべてはそれからだ」

「了解しました」

･･････命令が下されてから三時間後、生谷冬馬と娘の桃奈は忽然と姿を消した。以来、父娘の姿を見た者はいない。

　　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。

**第三章　　触獄の宴**

　･･････日本白の党の前進は、日本救民団という民間の支援団体である。この団体は、人権派弁護士として知られる代田淳史によって設立された。一九九〇年のことである。当時の日本は、バブル崩壊によって経済が壊滅的な打撃を受け、社会が大混乱に陥っていた時代である。世間では若者の就職難に主な焦点が当てられていたが、日本救民団は、その影で苦しむ者たち――夫からの暴力を受けたシングルマザーや社会的支援のない独居老人、医療的ケア児とその家族、身体知的障害者とその家族、癌などの病気で親を失った孤児など、当時はあまりスポットライトが当たらなかった少数の社会的困窮者を支援するために結成されたのだった。活動費には代田淳史の私財の他、有志たちが持ち寄った浄財が充てられた。今も昔も、私欲を排して他人を救おうとする者が、知られていないだけで日本にはけっこういるのだ。

　日本救民団の活動は多岐に及ぶ。行政との交渉、各種手続きのサポート、避難シェルターの運営、就職の斡旋、刑務所から出所した者の支援、貧困家庭への食糧配布など。日本救民団の活動によって多くの社会的弱者が救われたが、その活動が表立って評価されることはなかった。代田淳史の左翼的発言が、政権与党からたびたび問題視されたからである。社会の混乱期、社会的弱者を救済することなく銀行や大企業ばかりに公的資金を投入した政府を、代田淳史は生涯に渡って非難し続けた。

　代田淳史は二十一世紀を目前にして亡くなったが、日本救民団は息子の代田優が跡を継ぎ、団体の活動は継続された。代田優は当初、父親と同じ路線を進み、政治とは無関係の姿勢を貫いたが、考えを変えるきっかけがあった。

　それは、派遣法の改正である。二〇〇三年、小泉構造改革の一環として派遣業種が拡大され規制が撤廃されたのだが、代田優はこれに強い危機感を覚えた。

「この法律はかつてないほどの悪法だ！　こんな法律がまかり通れば、社会は生活が成り立たない者たちで溢れ、日本社会はいずれ大変なことになるぞ！」

　彼の予想はほどなくして的中することになる。いわゆるリーマンショックが起こったのだ。

　サブプライム問題と、投資銀行リーマンブラザーズの破綻は、全世界に衝撃をもたらして、世界恐慌に発展した。それは日本も例外ではなく、日経平均株価は下落の一途を辿り、リストラや企業の倒産が相次いだ。

この時、クローズアップされたのが、年越し派遣村に代表される企業の派遣切りであった。大企業の業績悪化にともなって、日本全国で数多の派遣労働者たちが首を切られたのだ。彼らは職を失っただけでなく、保障も、収入も、住む場所すらも失って、路頭に迷った。無傷な業種は介護業界くらいで、この時ばかりは、慢性的に人手不足の福祉業界が、空前の買い手市場で潤ったものである。この時の思わぬ人材ボーナスに胡坐をかいて高慢に振る舞ったことで、いま、介護は人材不足に苦しんでいるのだが、同情の余地はないだろう。自業自得とは、まさにこれを指しての言葉である。

　話が逸れたが、この時、声高らかに叫ばれたのが、「自己責任」という呪いの言葉であった。本来であれば国が率先して支援しなければならない非常事態なのに、政府や政治家は、権力闘争や私腹を肥やすことに明け暮れて、社会的に弱い立場の者を助けなかった。見捨てたのだ。「自己責任」という大変ありがたい言葉を高慢に口にしながら。

　代田優はそんな社会の現状を見兼ねて、この腐った国を変えるためには政治権力を得るしかないと考えた。そうして結成されたのが、政治団体「日本白の党」であった。

　日本白の党は弱者救済を党是とし、社会福祉の向上と大企業や富裕層への課税強化を訴えて幾度かの選挙に臨んだ。その結果、幾つかの道府県議会で議席を確保することはできたのだが、国政選挙の結果は散々なものばかりだった。党首である代田優を筆頭に、候補者は小選挙区で当選できなかったばかりか、得票数も伸び悩み、比例代表でも議席を確保できなかったのである。ただ、これは別に政治的陰謀によるものではなかった。単純に日本白の党の主張が受け入れられず、勢いも弱かったからである。

　三〇年も経済成長していないとはいえ、日本はまだまだ豊かだったし、政権与党も民意の支持を受けて強かった。それに、社会的あるいは経済的に弱い立場の者がいることに、多くの国民が慣れてしまい、彼らを助けることをヨシとしない空気が蔓延していたこともある。多くの国民は、社会から脱落した者を見下し、あるいは蔑んで、自分よりも弱い立場の者に手を差し伸べることを批判した。

「そんなことをしても税金の無駄遣いだ！」

と言って。

それこそが、権力者たちの思う壺だと気づかずに――いや、気づいていながらも、気づかない振りをして。

　代田優は選挙での度重なる敗北に精神を病み、失意のうちに没した。まだ五十代と若かったが、心身の不調による心不全であった。

　日本白の党は小さな規模の組織だが、組織であれば大なり小なり権力闘争が生じるものである。代田優の死後、日本白の党は、古参の幹部たちを中心に幾つかの派閥に分裂して党首の地位や今後の運営方針を巡って対立するにいたった。そんななか、台頭したのが代田優の娘でトップグラビアアイドルとして活躍していた代田真凛であった。

　代田真凛は、一見すると政治とは無関係な人生を送ってきたように思われる。小・中・高と極普通の学校生活を送り、恋よりも友情が充実した青春時代を過ごし、街中でのスカウトによってグラビアアイドルとしてデビューを果たすと、そのまま一気に芸能界のトップに昇り詰めた。テレビでもネットでもその他の活動でも、彼女は成功を収め、政治とは無縁でも、相当に富貴な生活を送れるだけの地位と財を手に入れた。それも、若くしてだ。

「だが、流れる血の熱量は、父祖らに勝るとも劣らぬものがあったようだな」

代田真凛の人生は、一見すると、社会福祉や弱者救済とは無縁のように思われる。だが、黒堂芥が調べさせたところによると、彼女は幼少期から社会の不条理に強い憤りを覚えていた傾向がある。

　中学時代の同級生は、父親が派遣切りにあって自殺したため、精神を病んで引きこもりになった。仲の良かった友達は、貧困を苦にして母親と心中している。ボランティア活動でたびたび訪問していた児童養護施設は、大企業の再開発計画によって、強引に施設を壊された。タレントとして参加したチャリティーイベントでメディア幹部たちによる着服が発覚した際、誰よりも強い言葉で非難したのは彼女だった。

「そして、芸能界に身を置く過程で、黒の会について知ったというわけか――こう見ると、世間を驚かせた政治家への転身も、ある意味必然だったように思えるな」

日本白の党の党首となった彼女はなにをしようとしているのか。それは、彼女が芸能界を辞めたあと、沈黙していた二年間にヒントがある。

この間、代田真凛は、自分の肉体を武器に白の党幹部たちを篭絡して党を掌握すると、様々な活動家と密会したり、著名なジャーナリストと接触したり、さらには自分の熱狂的なファンたちを使ってなにか地下工作めいたこともしていた。それこそ、生谷冬馬が所属していた活動グループも、彼女の仲間によって運営されていたものだったのだ。

「黒の会に関する情報を集めてなにをするつもりだったのか――まぁ、考えるまでもないか」

　少なくとも、黒の会にとって悪い方向に使われたことは確かだろう。

黒堂芥は実働部隊の精鋭を招集した。その数、四〇人。いずれの者も、破壊と、殺人と、暴力と、情報操作と、証拠隠滅に長けた特殊工作員たちであり、国内外で様々な実績を積んできた者たちである。職業として現役の立場にいる者も少なくなかった。

　彼らを前にして、黒堂芥は静かに告げた。

「標的は、日本白の党党首である代田真凛とその関係者たち。黒の会の存在を知る者、知った者、そして情報に接した者は、ひとり残らず処分しろ。ただし、党首は殺すな。生かして捕まえろ。無謀な挑戦をしたことを、その身をもってわからせるゆえに」

「「了解！」」

･･････かくして、事態はいま、大詰めを迎える。

　　　　　＊

　･･････日を跨いで、幾つかのニュースが全国に流れた。

「今月七日より、東京都台東区に住む生谷さん親子の行方がわからなくなっています。生谷さん親子は、学童クラブの帰りから連絡が取れなくなっており、警察は生谷さん親子に関する情報を求めるとともに、事件と事故の両面から捜査をはじめました」

「愛知県名古屋市のホテルにて、日本白の党の幹事長を務める新井真一氏が亡くなっているのが見つかりました。警察の調べによりますと、新井氏の遺体に外傷はなく、司法解剖の結果、心不全で亡くなったとみられています」

「山梨県の山中で、止まっている車の中から男女八人が亡くなっているのが見つかりました。車内からは練炭などが見つかっており、警察は集団自殺とみて捜査を進めています」

「ジャーナリストの椚直也さんが、取材先のネパールで行方不明になってから今日で一週間が経過しました。地元警察によりますと、椚さんは取材先から首都カトマンズに戻る途中で行方不明になったと思われ、同行していた通訳の行方もわからなくなっていることから、なんらかの事件に巻き込まれたとみられています」

「札幌発成田行の大日本航空七七四便が、栃木県日光市山中に墜落したとの情報が入ってきました。この飛行機には、乗客乗員合わせて二二二名が搭乗しており、現在、救助隊が現地に向かっているとのことです」

「今日正午ごろ、東京都渋谷区にある日本白の党の本部ビルで大規模な爆発が起こりました。この爆発でビルは倒壊、当時ビルにいた多数の人が生き埋めになっているとの情報もあり、現在、懸命な救助活動がおこなわれています。連絡がとれない人の中には、先日、党首となったばかりの代田真凛さんも含まれていて、安否が心配されています」

――これら一連のニュースが、すべて計画的に実行に移された犯行であろうとは、全知全能の神でもなければ知る由もないことであった。

　　　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。